しんらばんしょう

全面教育学研究会通信

2011.1.1　No.4

《１０月例会報告》

「認識」を認識する

人間をじかに動かしているのは認識である！

精神や思考の頭脳活動は認識から始まり、発展し深化していく。

表現活動の根本に認識があり、世の森羅万象が認識の対象となる。

「認識」を整理する

認識というと何か整然としたもののように思えるが、そこには感覚的なものや感情的なものもふくまれる。

たとえば、朝「おなかが痛い」と子供が訴えたら､なぜなのかを考えねばならない。学校に行きたくないのか、ゆうべ食べたものが原因で本当におなかが痛いのか、判断する。これも認識といえるだろう。

認識は頭脳活動だが、その過程は感覚→知覚→表象→概念→判断→推理の７つになる。それをさらに感覚→表象→概念の３つにまとめたのが庄司認識論で、それを敢えて「知識作りの頭脳活動」と銘打っているのである。

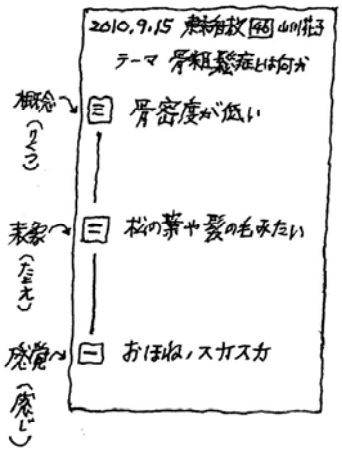
認識論とは、知識作りの法則性を明らかにする学問である、と規定する。この法則性こそが核になる点で、認識の抽象化を考えるに当たってそれぞれのレベルを整理し三段階理論を構築したのである。

認識のフィールドとして「科学的認識」（科学）「宗教的認識」（非科学）「コトワザ的認識」（前科学）を認識三論として集約している点も注目に値する。それはあらゆる頭脳活動を網羅しようとした結果であるからだ。認識は対象をもとにして知識化しそれをさらに表現と押し出す我々の日常を支えているものなのだ。

さらに認識論の到達点ということで今回紹介されたのは、具象―半抽象―抽象と段階を区分した認識過程で、抽象度の具体例が多すぎた点を整理し、抽象度の一つとして「正―反―合」などという対立度という区分で整理したことが注目される。

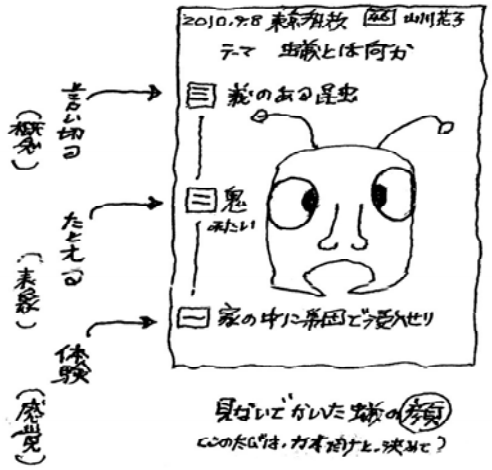
認識の最終段階は概念化だが、それを日常化する手法として「三段階論文作り」を庄司先生は推奨している。科学の結論は一つに集約されるが、それ以外の分野での認識は百人百様である。それは三段階理論の三段階目の概念化を見るとよく分かるという。

具体的には「とは思考法」という手法が上げられる。人生とは？看護とは？蟻とは？こういう自問を右のような３つの段階で深めていくのである。



実際１８歳の看護学生に「とは思考法」を投げかけてみると、様々な概念が浮かび上がってくるという。特に第１段階の体験が貴重でそこに概念化の大きな鍵があると思われる。

最後に植垣さんが「認識は知識作りの頭脳活動だけなのか」と質問したのに対して庄司先生は、「精神作りの頭脳活動」つまり心の問題を取り上げたい、と語った。そしてこれが結論部分と考えているということであった。「認識とは精神作りの頭脳活動」でもあるのだ。この辺を我々も考えていかねばならない。ともかくこの三段階認識論は、現実の世界の頭脳活動を整理する大きな武器になることはいうまでもない。



ＴＢＳラジオ番組裏話

小田富英・植垣一彦

柳田國男の命日である８月８日にＴＢＳラジオで放送された特集番組（「日曜サンデー」）については先号でも紹介したが、今回はこの番組を聞いたことのない人のために当日小田さんが録音テープを持参して番組を紹介してくれた。

ＴＢＳでは、当初メーンゲストとして鎌田久子氏や谷川健一氏を考えていたらしいのだが固持されて庄司先生になったらしい。しかしあの番組の雰囲気からして庄司先生で正解であっただろう。爆笑問題との丁々発止のやりとりは庄司先生でなければできなかったにちがいない。

「猪木のビンタ」

今沢　正史

「かつて、プロレスラーアントニオ猪木がテレビのバラエティ番組に出演したときがありました。その時、猪木はパフォーマンスで、根性を鍛えるということで、出演者のほっぺにピンタをしたのでした。…」

で、はじまる今沢さんのレポートは、やがてＴＶ出演者がこぞって猪木にピンタをもらおうとしたことを足がかりに、弁証法の量から質への転換が起こっていくという発想に発展していく。そして、今沢さん自身が「猪木のピンタ」を「不屈の精神力」と読み替え変換していくことで新たなる認識が現れてくるという興味深いものであった。

さてこのわかりやすいレポートに全面研のつわものの面々が様々な解釈を試みた。

接続詞に着目したのは向井さん。たとえば、つまり、という上り下り言葉がうまく機能していない点と、そして、それで、という並列の接続詞の多用によって今沢論文がなかなか結論へ収斂されていかない様子を指摘している。

植垣さんも、論文の中に庄司先生の私信を挿入したのはどうかと注文をつけている。

バラエティ番組の中の「猪木のビンタ」は一つのパフォーマンスとして祭りの中でのハレの中での扱いではないかと思うといったのは尾崎、徳永。庄司先生は南郷理論

をそのままに意識した今沢さんのレポートに欲しいのは「遊び」の精神ではないか、ともいってる。

さて尾崎さんは「猪木のビンタ」を縮みのコトワザではないかと評したが、その辺りを以下に紹介したい。

コトワザ表現の「伸び」と「縮み」

尾崎 光弘

いろはカルタは、子どもたちがコトワザを自分のものにするための一つの教育法であった。しかし「油断大敵」など具体的な絵が浮かばない例もある。「油断大敵」は後ろに「火がぼうぼう」という後句が本来あったのだという。「油断大敵、火がぼうぼう」という本来の言い方に変えることを尾崎さんは「伸び」といいい、「油断大敵」だけを表す言い方を「縮み」と表現した。

「貧乏ひまなしシジミ売り」は今は死語となっているが現実の世界では「貧乏ひまなし学校の先生」という創作も成り立つ。後句はこのように変遷して変化しても、前句は立派に生きているのである。尾崎さんは、コトワザに内在する「伸び」「縮み」を「大衆の歴史的なコトワザ習得法」と規定した。もし今沢さんが「猪木のビンタ」に後句をつけるとしたらどのような言葉をつけるのか、興味深いところである。

・コトワザ遊びコレクション
・「ことわざ」はどのように理解されているか

向井 吉人

ことば及びことば遊びについて膨大な資料を持って目を通している向井さんからＢ５用紙３枚の内容でコトワザに関する資料、参考文献の紹介があった。これらを見ると今は亡き吉田ゆたかさんの労作『まんがことわざ事典』がでた３０年前に比べるとコトワザの注目度はぐんと上がったことが分かる。

それはもう一つのレポート『「ことわざ」はどのように理解されているか』という西多摩自由大学の向井講座参加者のアンケートが興味深かった。

自薦の思いついたことわざに「なぜそのことわざ」を思いついたのか、という問いがあり、その答えがそれぞれの人の人生や生き方を語っているように読めるのである。

柳田國男は、ことわざは内面を高めるためのものだといっているが、いろいろな人が日常の中でことわざを使った生活をしていることが分かりそのことばの深さを再認識した。

向井さんは、ことわざは「決まり文句」だと言っている。だからだじゃれのように頻繁に使われるものではないのだが、一つのことわざには深い経験や概念が込められており、使い方次第では、高い表現意識を生むことになると述べている。

《紹介できなかったレポート・報告》

１．植垣一彦「表象の力」

社会保険船橋保健看護専門学校１年生の授業での作品集。絵を使った「看護婦とは。まるで～のようだ。」の概念作りが興味深い。

２．小田富英「柳田民俗学と教育現場の蜜月は再来するか」（伊那民俗学研究所報2010.6.20）柳田教育学と庄司全面教育学のクロスオーバーを語る。

３．徳永忠雄「世相史研究から社会科を考える」長年の『明治大正史世相編』研究と中学校社会科を結ぶ試み

復刻　庄司和晃著作

つつむ雰囲気の温かさ

一と口に初等教育と申しましても勉強をたんねんに教えることもあり、おくれずに学校に来ること道の歩き方などさまざまのしつけに関したものがあります。そればかりでなく勉強が面白くやれて学校生活に喜びを感ずるようにもっていくとくべつのテクニックの面もあります。そしてそれらの底に新しい人間の夢もたくされていなければなりませんし、子供へのこまやかな愛情も宿されていなければなりません。亀井氏は『現代人の研究』において教育ということを「教育者の夢を新しい生命の上に描く無償の行為である」と申しておりますが、まさしく教育とは無償の行為でありましょう。初等教育においてその感を更に深くしております。

私たちには「いい子になってほしい」というただそれだけの願いがあるだけです。いい子という言葉にはどことなく、ばくぜんとしたものがひそんでおりますが、明るい子供といい、責任ある生産的な子供といいすべてはその中にふくまれております。ですから明朗でない子供にはつとめて笑顔を示すように温かい手をもっていきますし、明朗であっても後始末の悪い子にはきちんとお仕事が最後まで出来るように気長に待ってやります。

大事な事は画一的な集団統制よりも一人ひとりの子供にほんとうにタッチしていくことが子供を認めてやる近道ではないでしょうか。とかくこう申しますと、社会性が果たしてそこから生まれてくるかといわれそうですが、それこそ本末テントウの考えではありますまいか。社会性とは何か。自分でもよく飲み込めておりませんが、先生の柔和な態度と子供の生き生きとした目の輝くから形作られた雰囲気、この中から自分一人だけでなく、みんなのことを考える子供が誕生してくるのだと思います。そういう雰囲気を保つことこそ社会性のある人間をつくる先生の役目ではないでしょうか。初等教育において社会性とはたんなるスローガン、お題目のお説教ではありますまい。私は温かい雰囲気でつつんでやることだと思います。

先生の注意過多症、イン気な渋すぎる態度、子供のとげとげしい言いあい、どろんとしたうつろな眼、こんな教場風景からはたとえ温かいお題目、いかめしいスローガンがひびいてくるにせよ、望ましい子供が生まれてくるとは想像できないと思います。

とくに初等教育という母親がわりの気持を十分に必要とする所では、包む雰囲気の温かさは、社会性を育てる必要条件というよりはむしろ前提条件と申さねばならないでしょう。

こういう気持の上にたって軽蔑されやすい教育上のテクニック、子供への小さな愛情を広くとらえてその意味する所をたずねてみたのでした。

（『教育者としての青春』（明治図書）より『人間と教育』第四号・一九五四年二月・成城学園初等学校）

◆次回全面研例会

日時　２月５日（土）１４：００～
場所　お茶の水　喫茶「アミ」
連絡　090-8721-5517（徳永）
内容　持ち込みレポートによる